

【研究ノート】

ハマニンニクの利用と「テンキ」
—18世紀後半の絵図・記述を中心にして—

荒山千恵

はじめに

浜植物ハマニンニク（イネ科の多年草／学名：*Leymus mollis*）の葉を素材にして作られた入れ物「テンキ」は、特に千島アイヌによって作られたものが江戸・明治期より知られてきた。そのことは、一つに実物資料が国内外の博物館を中心に収蔵されていること、もう一つに当時の絵図や記述のなかに「テンキ」が見られることから明らかである。本稿では、特に 18 世紀後半の絵図・記述にみられる「テンキ」を中心に、その特徴について検討する。

1. 研究の背景

1-1. 用語の確認

本論に入る前に、小稿で使用する用語について確認する。一つは、製作技法についてである。編物の基本組織については、「交叉組織」「捩（もじ）り組織」「巻き組織」「輪奈組織」の 4 種に大別される（吉本 1987）¹。そのうち、本稿で主に取り上げるのは「巻き組織」および「捩り組織」である。「巻き組織」については、コイリング（Coiling）の呼称でも知られている。「捩り組織」については、Roger G. Rose の‘Twining’において、8 種の組織が示されており詳しい（Rose 1983）。これらの分類をもとに、本稿では、荒山（2013）の名称と同様に、基本となる素材（芯材）に他の素材（巻材）を巻きつけて編み進める方法を「巻編み技法」、一方の素材にもう一方（1 対）の素材をよじり合わせて編み進める方法を「もじり編み技法」と記す。もう一つは、入れ物の形状についてである。入れ物の立体的な形状が使用時に変化しにくいものを「容器タイプ」とする。また、入れ物のマチの有無にかかわらず使用時に立体的な形状の変化しやすいものを「袋状タイプ」とする。製作技法と形状の関係については、巻編み技法では主に容器タイプ、もじり編み技法では主に袋状タイプが該当する。

1-2. 問題の所在

「テンキ」にかかわる近年の調査研究では、第一に、物質文化研究における実物「テンキ」の資料調査・資料紹介（小杉 1996、右代他 2013・2014・2015 等）、第二に、北太平洋沿岸地域の植物利用に言及した繊維製品の研究（齋藤玲 1995 等）、第三に、「テンキ」の製作技術についての復元研究（知里真希 2002、荒山 2013、信太 2014、齋藤和 2014 等）がある。

「テンキ」の調査研究を進めるうえで問題となるのは、「テンキ」と呼ばれるものが何を指すのか、その範疇が捉えにくいことにある。狭義には、千島アイヌが製作した巻編み技法による容器タイプのハマニンニク製品を指す傾向にあり、その背景は鳥居龍蔵（1919）や知里真志保（1953）の解説によるものと考えられる。

鳥居は、「円形籠」において次のように記している。

「千島アイヌは昔からテムキ **Temki** という蓋付きの小籠を作っている。もっぱら女が作るこの籠は、粗末なムリ草を重ねて作られる。(後略)」(鳥居 1976 (1919 の日本語訳収録) : 432)

「蝦夷アイヌもまた同じムリ草で種々の籠を作っているが、その形態は千島アイヌの作るものと異なっている。これは注目に価する。(後略)」(同上 : 433)

知里真志保は、「テンキグサ ハマニンニク *Elymus mollis Trin.*」の「参考」に、次のように記している。

「葉を乾燥して「てんき」**tenki** と稱する絲や針などを入れる小型の容器を編んだ(幌別、えとろふ)。テンキグサとゆう名稱わテンキを編む草の義であろう。但し、テンキなる語わ、i) 「手筈」などとゆうような日本語があつてそれがアイヌ語にとりいれられたか、ii) 或いわそれが固有語だとすればこの草をもとテンキと云い、それで編んだ容器だからテンキと云つたのであろう。**ténk-ki** < **ritén-ki** [やわらかい・稈] か。

(後略)」(知里真志保 1976 (1953 の覆刻) : 224-225)

一方で、ハマニンニク製の入れ物には、巻編み技法とは異なる製法で作られたものもみられる。知里眞希(2002)は、「テンキ草工芸」において、「編みかご」に「舟形容器」「小物入れ-1」「小物入れ-2」「透けるバスケット」、「コイリング」に「壺」「蓋つき容器-1」「蓋つき容器-2」「小判型容器」、「ゴザ編み」に「ドル札入れ」「書類入れ」を取り上げ復元製作した。知里眞希による復元製作をとおして、巻編み技法による容器タイプだけではない多様なハマニンニク製品が広く知られるようになったといえる。また、『アイヌの美—カムイと創造する世界—』(図録)では、「テンキ・ケトウシ(鞆)」の解説に、「(前略) サハリンではハマニンニク製のものをテンキと呼んでいる。これを編み機で編んでござ状のものを作り、それを折り返して鞆状にしている。(後略)」(内田祐 2009 : 16) とある。右代啓視他(2013・2014・2015)では、北方四島および千島列島で収集された「テンキ」の調査において、素材を編んで袋状ないしバッグ状を成すタイプとコイリング技法で形成する容器のタイプに分類し、両者を対象に「テンキ」ないしは「テンキ製品」としている。広義には、千島列島の「テンキ製品」、さらには、「テンキ草で作るアイヌプリ・バスケット」²として、ハマニンニク製の入れ物全般を「テンキ」と捉えることも考えられる。ただし、もじり編み技法にみる多様な袋状タイプについては、博物館等に収蔵される資料名が別の名称で登載され、「テンキ」と位置づけられていない場合もある。

このような現況を踏まえて、本稿では、異なる視点からみた「テンキ」の範疇として、18世紀後半の絵図・記述に残された「テンキ」もしくはハマニンニクを通して、それらがどのように描かれ、説明されたのかを考察する。荒山(2013)では、巻編み技法による「テンキ」の復元製作と共に、「テンキ」ならびにハマニンニクに関する記述に触れ、絵図・記述にみる「テンキ」の特徴について整理する必要性を再認識した。次章では、まず、実物資料において知られてきた狭義における「テンキ」の特徴について確認する。次に、絵図・記述にみられる「テンキ」ならびにハマニンニクの特徴について検討する。



写真1 テンキ
資料名：物入
市立函館博物館蔵／
収蔵番号：民族1205
1875～1876（明治8～9）年
開拓使東京収集、北千島シュムシュ島
大きさ：L215・W240・H193mm
（写真：市立函館博物館提供）

2. 資料の検討

2-1. 実物資料にみる「テンキ」

実物資料にみる「テンキ」は、巻編み技法による容器タイプの入れ物がよく知られ、円形や楕円形が多く、蓋付きのものが多く見られる（写真1）³。巻編み技法による容器タイプの「テンキ」の特徴は、容器に厚みがあること、適度な柔軟性をもちあわせながらも形状が変化しにくいこと、緻密な編目であること、丈夫で軽いことなどが挙げられる。特に、製作の際にその一目ずつに前段の編目をすくいながら緻密に巻きつけて編まれている点は、容器の仕上がり強度と精巧さを生み出している。また、ハマニンククの葉の特性としては、乾燥させるとストロー状に丸まり線状に細くなること、葉に光沢がある

こと、適度な耐水性があることなどが挙げられる。このような素材の特性から、実用性と共に工芸品としての美しさを合わせもつ入れ物に仕上がるものと考えられる。

2-2. 「テンキ」にかかわる絵図・記述

「テンキ」もしくはハマニンクにかかわる絵図・記述について、主に18世紀後半に残されたものを中心に取り上げる。

(1) 松前広長 『松前志』/1781（天明元）年（図1）

「テンキ」の記述・絵図がある。記述については、以下①に引用する。絵図は簡易な描写である。底部はマチを表現したものであろうか。口縁部には紐状のアーチを連ねたとみられる表現が描かれている。

① 「テンキ」

「方俗これをコタスと云。テンキは夷方の詞なり。是尋常の雑物にあらず、水草にて編たるものなり、兵糧を入べき器なり。是亦北韃の産なり。図略之。或云、夷人のムルチと云へる草は、此一物を製するものなりとぞ未詳。」（松前〔大友編〕1972：309、下線は筆者⁴）

(2) 菅江真澄 『蝦夷喧辞辨』/1789（寛政元）年（図2）

記述部分を、以下②に引用する。「リテムギという籠のようなもの」とある。絵図をみると、全体の編目はⅢⅢⅢで描かれ、上部にはXXXの編目がみられる。また、口縁部には紐状のアーチを連ねており、さらに玉を通したとみられる細紐が上端部に付けられている。なお、菅江真澄の随筆『しのはぐさ』⁵にある「牟呂知具佐」（むろちぐさ）にも記述があり、以下③に引用する。「理互牟宜」（リテムギ）や「蝦夷小出」（エゾコダス）の名称が記されている。

② 『蝦夷喧辞辨』

「（前略）遠い蝦夷人がみやげにもってきた渡来物、リテムギという籠のようなものを贈られたときにも、（後略）」（菅江〔内田・宮本訳〕1966：135）

③ 『しのはぐさ』「牟呂知具佐」

「(前略) 此草の夏苺をもて、奥蝦夷人の婦人ども、かざりのやうなるものを、くさくさのあやをなして編なせり。その名を、それらが詞に、理弓牟宜といふ。松前にて是を蝦夷小出といふ。(後略)」(菅江〔内田編〕1969: 120)

(3) 小林源之助 『蝦夷草木図』/1792 (寛政 4) 年成写本、栗本昌臧跋他 (図 3)

図 3 の絵図は栗本昌臧 (丹洲) の転写本である。墨書は原本の写し、朱筆の注記は栗本昌臧、藍墨は坂丹邸の書き入れとされる⁶。絵図の上端部には墨書で「ムリ カラフト島リ シュンナイニテ写」と記されている。その横には、「カラフトルータカ マサッチイ」と藍墨とみられる記述があり、さらに左横に藍墨の記述が続く。絵図の下部に記された朱筆の中には「リテンギ」の記述があり、以下④に引用する。

④「ムリ」

「(前略) 其葉長シテ後柔韌ニシテ蓆ヲ織リ又袋ニ造る夷語ニリテンギト云ルヨシ (後略)」(小林画 1792 成写本: 引用は栗本による朱筆の注記より)

(4) 谷元旦 『蝦夷記行図』下/1799 (寛政 11) 年 (図 4)

「テンキ圖」と記され、絵図が描かれている⁷。全体の編目はⅢⅢⅢで描かれており、そこにXXXの編目を横方向に入れて仕上げている。さらに、口縁部には紐状のアーチを連ねている。

(5) 土岐新甫 (養伯) 『東蝦夷物産誌』/1799 (寛政 11) 年

「ムリ」の記述があり、その中に「テンキ」について記されている。

⑤「ムリ」

「(前略) 夏秋刈て晒乾し編て蓆となす 又呼てキナとなす 又カラフト エトロフクナ シリ等にて此草葉を以アミテ テンキト云物を作る其製尤精巧にして雅也 アツケシ にも造る 其製僞なり」(土岐 1799)

(6) 秦櫛磨 (村上島之允) 『蝦夷島奇観』/1800 (寛政 12) 年 写 (図 5、図 6)

「モロチキナ寫生」と「テンキ圖」について、それぞれ絵図および記述がある。「テンキ圖」では編目が丹念に描かれている。ⅢⅢⅢとXXXの2種がみられ、市松模様になるように編み分けている。口縁部には紐状のアーチを連ねている。記述については以下⑥および⑦に引用する。

⑥「モロチキナ寫生」(図 5)

「此草、蝦夷地砂濱何處にも産せり。奥地に至にしたかひ、能生せり。シコタン島、エトロー島勝れて長し。新苗を刈捨、夫より生出たる葉を中秋に刈り、テンキといふ編袋に製せり。」(秦〔佐々木・谷澤(解説)〕1982: 221-222)

⑦「テンキ圖」(図 6)

「モロチにて編たり。大小種々あり。エトロー島シコタン島の二島に出る。女夷の作る處なり。美工密製、愛翫すへし。」(秦〔佐々木利・谷澤(解説)〕1982: 222)

(7) 木村兼葭堂 (1736-1802) 地域別本邦物産分類書『諸国庶物志』

「リテンキ」の記述があり、以下⑧に引用する。

⑧「リテンキ」

「草ニテ造る巾着ニ似タリ」(木村〔水田編〕2001: 90)

3. 考察—絵図・記述にみる「テンキ」の特徴

3-1. 絵図にみる「テンキ」

絵図「テンキ」について、ここでは主に二つの特徴について取り上げる。一つは、編目の描写についてである。図2・4・6では、ⅢⅢⅢとXXXによる編目の表現がみられる。ⅢⅢⅢの表現については、巻編み技法の編目を描いた可能性も考えられるが、巻編み技法にXXXの編目を組み合わせることは実物資料に認められない。ⅢⅢⅢとXXXの編目を組み合わせて作られている点から、もじり編み技法を基本に模様編みXXXを施した入れ物であることが推測される。もう一つは、入れ物の口縁部についてである。図1・2・4・6では、いずれも編紐とみられるものをアーチ状に連ねたものが認められ、装飾的なものと考えられる。加えて、これらの絵図にみる入れ物には、いずれも蓋付きの表現は認められない。これらの

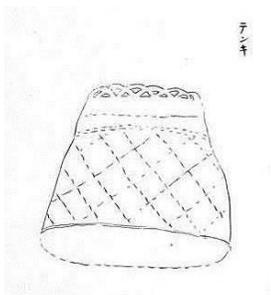


図1 「テンキ」『松前志』
(北海道大学附属図書館北方資料データベース
『松前志』9・10, 26/44.)

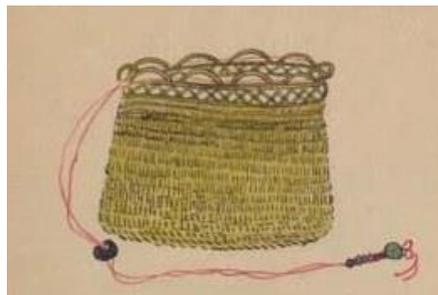


図2 「リテムギ」『蝦夷喧辞辨』
(北海道大学附属図書館北方資料データベース
『蝦夷喧辞辨』, 7/53.)



図3 「ムリ」『蝦夷草木図』
(国立国会図書館デジタルコレクション
『蝦夷草木図』栗本昌臧跋, 50・51/78.)

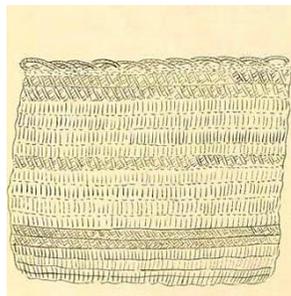


図4 「テンキ圖」『蝦夷記行図』
(北海道大学附属図書館北方資料データベース
『蝦夷記行図』下, 47/60.)



図5 「モロチキナ寫生」『蝦夷島奇観』
(東京国立博物館, 画像番号 C0012856.)



図6 「テンキ圖」『蝦夷島奇観』
(東京国立博物館, 画像番号 C0012857.)

点から考えると、図2・4・6の「テンキ」は、実物資料「テンキ」に一般的な巻編み技法による容器タイプではなく、もじり編み技法による袋状タイプを描いた可能性が高い。また、図1については描写が簡易的であることが考えられるが、巻編み技法の編目の特徴とは考え難く、また容器タイプに多く見られる蓋も描かれていないことから、もじり編み技法を基本とした袋状タイプである可能性が考えられる。

3-2. 記述にみる「テンキ」

記述にみる「テンキ」から、「テンキ」の名称および説明（別名・用途／地域性）、ハマニンニクの名称について確認する（表1）。

第一に、「テンキ」の名称についてである。『松前志』『蝦夷記行図』『東蝦夷物産誌』『蝦夷島奇観』には「テンキ」とあり、この他に、『蝦夷喧辞辨』に「リテムギ」、『しのはぐさ』に「理互牟宜」、『蝦夷草木図』の朱筆に「リテンギ」、『諸国書物志』に「リテンキ」の名称がある。「テンキ」および「リテンキ」について、記述の内容からはその違いは明らかではない。

第二に、「テンキ」の説明についてである。「器」や「籠」に加えて、「コタス」「蝦夷小出」「袋」「編袋」「巾着」の記述が認められる。小出や袋とする説明が複数に認められることは、絵図に袋状タイプが描かれる点に共通した内容といえる。また、「精巧」「雅」「美工密製」の表現も認められ、「テンキ」の特徴を示している。さらに、『東蝦夷物産誌』には、「アツケシにても造る 其製籠なり」とも記されており、ハマニンニク製の入れ物には精巧で雅なものや粗いものがあり、その違いには地域性が窺われる。テンキの地域性について

表1 記述にみる「テンキ」およびハマニンニクの名称

出典	「テンキ」の名称	「テンキ」に関する説明① (別名・用途)	「テンキ」に関する説明② (地域性)	「ハマニンニク」の名称
『松前志』	テンキ	方俗:コタス 兵糧を入べき器	夷方の詞	ムルチ
『蝦夷喧辞辨』	リテムギ	籠のようなもの	渡来物	—
『しのはぐさ』	理互牟宜	松前:蝦夷小出といふ	製作:奥蝦夷人の婦人	牟呂知具佐
『蝦夷草木図』 (丹洲写本)	リテンギ(朱筆)	袋(朱筆)	カラフト島リシュンナイ (墨書)	ムリ(墨書) マサッチイ(藍墨)
『蝦夷記行図』	テンキ	—	—	—
『東蝦夷物産誌』	テンキ	—	カラフト エトロフ クナシリ等 :精巧にして雅 アツケシ:其製籠	ムリ
『蝦夷島奇観』	テンキ	編袋 大小種々あり 美工密製愛翫すべし	エトロー島シコタン島 女夷の作る處	モロチキナ モロチ
『諸国庶物志』	リテンキ	巾着ニ似タリ	—	—

は、渡来物・奥蝦夷・カラフト・エトロフ・クナシリ・シコタン等の記述から、千島列島および樺太においてハマニンニクを利用したものづくりが盛んであったことがわかる。

第三に、「ハマニンニク」の名称についてである。『蝦夷草木図』の墨書および『東蝦夷物産誌』には「ムリ」とあり、他には、『松前志』に「ムルチ」、『しのはぐさ』に「牟呂知具佐」、『蝦夷島奇観』に「モロチ」「モロチキナ」とある。『蝦夷草木図』の藍墨とみられる「マサッチイ」も、ハマニンニクを示すものと考えられる⁸。関連して、ハマニンニクの記述に採取時期を示したものがある。『しのはぐさ』には「夏苺」、『東蝦夷物産誌』には「夏秋刈て晒乾し編て蓆となす」、『蝦夷島奇観』には「新苗を刈捨、夫より生出たる葉を中秋に刈り」とあり、夏季から秋季にハマニンニクの葉を採取していたと考えられる。

3-3. 実物資料と絵図にみる類例の比較

絵図に確認された特徴を踏まえて、実物資料にみるもじり編み技法による袋状タイプのハマニンニク製品の中から、具体的な類例について検討する。その一つとして、谷元旦による『蝦夷記行図』「テンキ」(図4)の特徴を、北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園が収蔵するハマニンニク製の「小物入」(資料番号:11004)と比較する(写真2)^{9,10}。11004は編目が美しく精巧に作られた、もじり編み技法による袋状タイプである。収集地は伊達有珠、実物資料につけられたタグには「Saranip」の表記があり、「テンキ」の名称による登載はされていない。本資料(写真2)と絵図(図4)には、共通した特徴が認められる。第一に、編目がⅢⅢⅢを基本とし、そこにXXXの編目を入れている。第二に、全体の文様構成についてXXXの編目を横方向に3箇所入れて仕上げている。第三に、口縁部に編紐を付けている。11004は口縁部を一部破損しているが、残存部から編紐を付けていたとみられる。これらの点から、図4の「テンキ」は11004に類似した入れ物を描いたものと考えられる。関連して、菅江真澄の『蝦夷喧辞辨』に見られる「リテムギ」(図2)についても、上部のみに模様編みを施した類似品の可能性がある。一方、『蝦夷島奇観』に描かれている「テンキ」(図6)は、同様の文様構成による具体的な実物の類例を、現時点



写真2 ハマニンニク製の入れ物(袋状)

資料名: 小物入
北海道大学北方生物圏フィールド科学センター
植物園蔵/資料番号: 11004
収集: 1936年/伊達有珠/名取武光
大きさ: L214・H164mm
(写真: 筆者撮影)

では見つけることはできなかった。もじり編み技法による袋状タイプのハマニンニク製品については、「サラニプ」や「物入れ」等の名称で登載されていることもあり、「テンキ」として知られていない実物資料の中に類例が存在することも考えられるため、今後も検討していく必要がある。

4. まとめ—課題と展望

18世紀後半に残された絵図・記述にみる「テンキ」は、もじり編み技法による袋状タイプと推察され、狭義の「テンキ」における巻編み技法による容器タイプの特徴とは異なるものであった。その要因の一つ

には、絵図・記述と実物資料との時期の違いによる可能性が考えられる。本稿で取り上げた絵図・記述については主に18世紀後半に属するものであるのに対し、博物館等に収蔵されている実物資料「テンキ」の多くは19世紀後半から20世紀前半において収集されたものである。今後の課題として、ハマニンニク製品における地域性と変遷について、巻編み技法による容器タイプともじり編み技法による袋状タイプの両者を対象に、「テンキ」の名称ではないハマニンニク製品も含めて実物資料を集成し、さらに検討していくことが必要である。また、実物資料の集成と並行して、18世紀後半の絵図・記述にみる「テンキ」にかかわる資料についても、網羅的な集成と体系的な整理を進めていくことが求められる。海浜の草本ハマニンニクを利用した物質文化について、さらに探究していきたい。

謝辞

本稿は、2015年度北海道民族学会第2回研究会（12月12日／酪農学園大学）の研究発表「ハマニンニクの利用と「テンキ」」をもとに、一部改変のうえまとめたものである。発表後には各方面の方々より多くのご教示を賜り、本原稿の投稿後には査読者より多大なご教示とご助言をいただきました。また、写真の掲載にあたり、市立函館博物館、北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園、ならびに大矢京右氏、加藤克氏に大変お世話になりました。石橋孝夫氏・工藤義衛氏からは資料情報に関するご助言をいただきました。心より感謝申し上げます。

注

- 1 吉本（2013）では織物のあらたな定義のもと組織についての分類が示されているが、本稿では吉本（1987）の編物における4分類に基づいて製作技法を検討する。
- 2 知里真希（2002）のタイトルに基づく。
- 3 写真1の資料情報は市立函館博物館編（1979、2015）を参照した。
- 4 下線部について、図1の引用元による記述では、「図略之」の部分は「図如左」、「此一物」の部分は「此物」と記されているとみられる（北海道大学附属図書館北方資料データベース『松前志』9・10、25・26/44頁を参照）。
- 5 『しののはぐさ』が書かれた時期について、内田武志の解説によると、「文化12（1815）年の雄勝郡巡村以降に書いたと考えてよからう」（内田武1969：241）とある。
- 6 <http://www.ndl.go.jp/nature/cha1/index2.html#h325>（「国立国会図書館電子展示会」>「描かれた動物・植物 江戸時代の博物誌」>『『蝦夷草木図』 小林源之助原画 寛政4（1792）成 写本1冊 <亥-215>』）、および林・水島・手塚（2001）を参照した。
- 7 『蝦夷紀行図』と同様の絵図は『蝦夷器具圖式』（1799）にも見られる（谷〔大塚監修〕1991）。
- 8 知里真志保が「テンキグサ ハマニンニク」の項目で記している、「(5) mataxchi」および「(6) masaxsikem」の「masaxchi（濱の草原の陰莖）」（知里真志保1976:224）を参照した。
- 9 写真2の資料情報は北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園編（2008）を参照した。
- 10 写真2の類例については、模様編みの構成に一部違いはあるが、菅茶山アイヌコレクション（広島県立博物館蔵）の「小物入れ」（2点）にも見ることができる（「平成24年度アイヌ工芸品展 AINU-風のかたりべ」（北海道立近代美術館、財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構編2012）および「北海道博物館開館記念特別展 夷酋列像」（北海道博物館編2015）による展示実見と図録参照による。）

参考文献

荒山千恵

2013 「ハマニンニク製の容器「テンキ」—テーマ展「アイヌの工芸テンキ」および関連事業からの報告—」『いしかり砂丘の風資料館紀要』3、55-64頁。

右代啓視・鈴木琢也・藪中剛司・高橋勇人・村上孝一・スコヴァティツィーナ, V. M.

2013 「北方四島の先史文化研究と博物館交流の基礎づくり(Ⅲ)」『北海道開拓記念館研究紀要』41：59-82頁。

2014 「北方四島の先史文化研究と博物館交流の基礎づくり(Ⅳ)」『北海道開拓記念館研究紀要』

- 42 : 97-126頁.
- 2015「北方四島の先史文化研究と博物館交流の基礎づくり(V)」『北海道開拓記念館研究紀要』
43 : 37-66頁.
- 内田武志
1969「解説／しのはぐさ」『菅江真澄随筆集』東洋文庫143, 240-241頁.
- 内田祐一(財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構編)
2009「テンキ・ケトウシ(鞆)」『アイヌの美—カムイと創造する世界—』財団法人アイヌ文化
振興・研究推進機構, 16-17頁.
- 木村蒹葭堂(水田紀久編)
2001『諸国庶物史』木村蒹葭堂歿後200年記念 中尾松泉堂書店.
- 小杉 康
1996「物質文化からの民族文化誌的再構成の試み—クリールアイヌを例として—」『国立民族学
博物館研究報告』21(2), 391-502頁.
- 小林源之助(原画), 栗本丹州(転写)
1792成『蝦夷草木図』東京国立博物館デジタルコレクション.
- 斎藤和範
2014「千島アイヌの失われた伝統的技術「テンキ」の博物館講座における復元の試み」『北海道
立北方民族研究紀要』23, 75-86頁.
- 齋藤玲子
1995「北太平洋沿岸地域における植物性繊維製品についての考察」『北海道立北方民族博物館研
究紀要』4, 113-134頁.
- 市立函館博物館編
1979『市立函館博物館収蔵品目録〈1〉』民族資料篇 7.
2015『市立函館博物館平成27年度特別展示図録 千島樺太交換条約とアイヌ』.
- 菅江真澄
1789『蝦夷喧辞辨』(写本) 北海道大学北方資料室北方資料データベース.
菅江真澄(内田武志編)
1969『菅江真澄随筆集』東洋文庫143, 平凡社.
菅江真澄(内田武志・宮本常一訳)
1966『菅江真澄遊覧記(2)』東洋文庫68, 平凡社.
- 谷元 旦
1799『蝦夷紀行図 下』(自筆本) 北海道大学附属図書館/北方資料データベース.
谷元 旦(大塚和義監修)
1991『蝦夷風俗圖式 蝦夷器具圖式』足立美術.
- 知里真希
2002「テンキ草で作るアイヌブリ・バスケット」『アイヌ関連総合研究等助成事業研究報告』財
団法人アイヌ文化振興・研究推進機構, 1, 341-378頁.
- 知里真志保
1976『知里真志保著作集 分類アイヌ語辞典 植物編・動物編』別巻I, 平凡社(植物篇: 1953『分
類アイヌ語辞典第1巻植物篇』日本常民文化研究所彙報第64, 覆刻).
- 土岐新甫
1799『東蝦夷物産誌』(写本) 北海道大学附属図書館/北方資料データベース.
- 鳥居龍蔵(小林知生訳)
1976『考古民族学研究・千島アイヌ』鳥居龍蔵全集5, 朝日新聞社(原典1919『東京帝國大學紀
要第42冊第1編』日本語訳).
- 信太成子
2014「テンキの妙」『アイヌ関連総合研究等助成事業研究報告』公益財団法人アイヌ文化振興・
研究推進機構, 14, 1-60頁.
- 秦 憶丸
1800『蝦夷島奇観』東京国立博物館情報アーカイブ.
秦 憶丸(佐々木利和・谷澤尚一解説)

- 1982 『蝦夷島奇観』 雄峰社.
林昇太郎・水嶋未記・手塚薫
- 2001 「『蝦夷草木図』写本の比較」『北海道開拓記念館研究紀要』29, 135-176頁.
北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園編
- 2008 『北大植物園資料目録』6.
北海道博物館編
- 2015 『夷酋列像』「夷酋列像」展実行委員会, 北海道新聞社.
北海道立近代美術館, 財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構編
- 2012 『AINU ART—風のかたりべ』北海道新聞社.
北海道立北方民族博物館編
- 2005 『第20回特別展 アイヌと北の植物民族学～たべる・のむ・うむ～』
松前広長
- 1781 「テンキ」『松前志』九十(帝国図書館所蔵本写) 北海道大学附属図書館／北方資料データベース.
松前広長(大友喜三編)
- 1972 「松前志」『北門叢書』国書刊行会, 2.
吉本 忍
- 1987 「編物」『文化人類学事典』弘文堂, 22-23頁.
吉本 忍編
- 2013 『世界の織機と織物』国立民族学博物館.
- Rose, Roger G.
1983. “North American and Pacific Basketry: Some Perspectives”. In Suzi Jones (ed.), *Pacific Basket Makers: A Living Tradition*, pp.37-56. University of Alaska Museum, Fairbanks, Alaska.

(あらかやま・ちえ／いしかり砂丘の風資料館)